

氏名	田中智美
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第136号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文題目	造血幹細胞移植を受ける患者の実存性変容と その背景

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	136	(ふりがな) 氏 名	た な か と も み 田 中 智 美
修士論文題目	造血幹細胞移植を受ける患者の実存性変容とその背景		
研究の目的			
本研究は、造血器疾患の患者の視点から、移植という体験を通して、患者の実存性がどのように変容したのかを明らかにし、移植を受ける患者支援のあり方について検討することである。			
研究方法			
造血器疾患で非血縁者ドナーより移植を受けた後、外来通院中の移植実施時 20~50 歳代の成人患者 7 名に対し、半構成的面接によるデータ収集を行い質的帰納的に分析した。			
結果			
分析の結果、移植を受ける患者の実存性として【日常生活の変化に対する戸惑い】【健康と病のはざまでの揺らぎ】【骨髄移植の受療への葛藤】【自分自身との対峙】の 4 つの上位カテゴリーが抽出された。また、【日常生活の変化に対する戸惑い】は《別れを意識する》《周囲に遠慮する》《生活を危惧する》、【健康と病のはざまでの揺らぎ】は《健康を過信する》《病気への懸念》、【骨髄移植の受療への葛藤】は《実感が伴わない経験ををする》《骨髄移植に対する将来への期待と覚悟》《骨髄移植の賜物》、【自分自身との対峙】は《希望を失う》《生きる意味を問う》《人生のプロセスとしての死》《苦難と向き合うための経験の積み重ね》《子どもを優先する》の 13 の中位カテゴリーが抽出された。			
考察			
移植が必要であるという危機的状況に直面したことにより、これまで意識することのなかった死をイメージし、今日まで営んできた生活や家族とのつながりが絶たれることへの戸惑いや予期不安を抱いていた。これらの戸惑いや予期不安は移植後の日常生活においてもなお、再発などの不安とともに抱き続ける思いであった。移植に対しては、自己や周囲との関係において様々な葛藤を抱きながらも生きることへの希望を移植に託し、生きる術を手にして社会復帰した後も、死を意識しつつも自分自身との対峙する中で新たな実存性のあり方を模索し続けていると考えられた。			
総括			
看護師による患者支援のあり方として以下の知見が得られた。【日常生活の変化に対する戸惑い】に対しては、先の見通しが立たない状況にある患者の思いをくみ取り傍で支える力となる必要がある。【健康と病のはざまでの揺らぎ】に対しては、患者個人の健康・病気観を把握し、健康維持や病気の予防、移植後の生活への適応に患者がより適切な行動がとれるよう継続的に支援する必要がある。【骨髄移植の受療への葛藤】に対しては、移植の選択・決定を行った後も結果が予測できない不確かさがあるため、患者の抱える不確かさを共有した関わりが必要である。移植という経験をを通して自己にとっての「死」や「生」の意味づけなどを考えることは【自分自身との対峙】である。以上の関わりを行うには、看護師の死生観のあり様が患者の実存性を支えるうえで重要となる。			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。